北海道新聞　令和2年1月22日（朝刊・小樽後志版/16面）

歴史、景観生かし小樽活性化

色内大通り 可能性探る

歴史的建造物が立ち並ぶ小樽・色内大通りの活性化を巡り有識者や地元経営者が話し合うシンポジウムが20日、同通り沿いのカフェバー「石と鉄」で開かれた。市民ら約50人が参加し、歴史と景観を生かしたまちづくりを考えた。（西依一憲）

経営者らまちづくりシンポ

色内大通りは明治～昭和初期に鉄道の起点として栄えた手宮地区と旧銀行街をつなぐ市道の通称。沿道には旧日本郵船小樽支店など、市が来年度の認定を目指す文化庁の「地域型」日本遺産の構成文化財も多い。

北海道職業能力開発大学校特別顧問で市日本遺産推進協議会委員の駒木定正さんが基調講演。歴史的建造物に対する観光客の認識について「『なんとなくすごい』と思うが、それが何なのかいまひとつ分かっていない」と問題提起し、個々の文化財を物語で結びつけて発信する意義を説いた。

京都などで自動販売機やコインパーキングの看板が落ち着いた色調に抑制されていることに触れ「なぜ京都でできて小樽ではできないのか。（自販機などの企業側から）甘く見られているからだ」と指摘。官民を挙げて景観保護の意識を高める必要性を強調した。

色内大通りは観光スポットの堺町通り商店街につながる旧銀行街側でホテルなどの開発が進む一方、手宮側では空き地や空き施設も目立つ。

基調講演後の討論で、渋谷建設（色内1）の渋谷憲三社長は「色内大通りで商売をしたいという思いが（市内外の経営者に）共有されれば投資が集まり、空き地はできない」と地域の魅力向上が好循環を生むと指摘。このほか、堺町通り商店街の店舗の多くが比較的早い時間帯に閉店する現状を踏まえ、色内大通りの飲食店が夜間営業を拡充して補完する案が出された。

シンポは小樽商科大グローカルプロジェクト「日本遺産による小樽の歴史文化の広域観光資源化」（高野宏康代表）が主催した。

古い石蔵を活用した「石と鉄」の店内で開かれたシンポジウム
▼